

SoTL に基づいた教育実践研究計画を作成する プレFDプログラムの試行と評価[†]

大山牧子^{*1}・根岸千悠^{*1}・佐藤浩章^{*1}大阪大学全学教育推進機構^{*1}

大学教員が、持続的に教授活動を改善するためには、自分自身の教育実践を分析できる能力を涵養することが有効である。そこで本研究では、大阪大学のプレFDである「大学授業開発論Ⅲ」において、教育実践研究を計画するプログラムを試行し、それらの評価と課題を検討した。その結果、受講生の教育経験によって、教育実践研究計画のテーマの質が異なることが明らかになった。また、受講生自身が、SoTLは教授活動改善の根拠になると認識し、教育実践と教育実践研究業績の相乗的向上に寄与すると意義付けていることが示唆された。計画を実行に移すためには、プログラム修了後にコミュニティの構築を支援することが課題として示された。

キーワード：SoTL, 教育実践研究, プレFD, 大学教育

1. はじめに

近年、将来大学教員を目指す大学院生向けの教育に関するプログラム(Preparing Future Faculty; 以下プレFD)のニーズが高まってきており、研究大学を中心に様々なプログラムが開発されている(夏目 2011)。プレFDの範囲は、大学教員の職務である研究・教育・社会貢献・管理運営に関して多岐に渡るものであるが(田口ほか 2010)、わが国の大学では、とりわけ教育力に焦点化したプログラムが多く展開しており、高等教育の理解・教育技術の習得のほか、模擬授業といった、教育実践の訓練を行っている(栗田ほか 2014, 今野 2016)。多くの大学初任教員が、授業技術に対して不安を抱いている現状(田口ほか 2006)に鑑みると、これらのプログラムは、将来大学教員を目指す院生にとって、教育に関して自信を身につけさせる手立ての一つとなる。ただし、そのような授業技術への不安は、大学教員になって、初任の段階で一定程度解消し得る

課題でもある(大山・田口 2014)。大学の教職に就いた後も、持続可能な形で、自身の教授活動の改善を行うためには、授業技術に加えて、学生の学習に基づいて自らの教育実践を分析できる能力、SoTL(Scholarship of Teaching and Learning)を実践する力を身につけることが重要であると考えられる。

SoTLとは、BOYER(1990)が提唱したScholarship of Teaching(教授の学識)に、Learningが加わり発展して提言されたものである(SHULMAN 1999)。具体的には研究者ではなく、学者としての大学教員が、教育を研究と同様に扱い、その成果を公表・批判・評価・利用することである。したがって、プレFDプログラムにおいて、SoTLの概念を理解して自らの教育実践を研究にして公表するための素地を作っておくことは、教授活動を持続的に改善するための大学教員を養成することにつながると考えられる。

本研究では、SoTLの考え方を理解することと、教育実践に関する研究計画を立てることを目的としたプレFDプログラム(大学授業開発論Ⅲ)の開発と試行、ならびに評価を行うことを目的とする。

2. 実践の概要

2.1. 大阪大学未来の大学教員養成プログラム

筆者が所属する大阪大学では、「大阪大学未来の大学教員養成プログラム」をプレFDプログラムとして

2017年4月26日受理

[†] Makiko OYAMA^{*1}, Chiharu NEGISHI^{*1}, and Hiroaki SATO^{*1}: A Trial Practice and Evaluation of the Educational Research for Practical Approach based on SoTL in Preparing Future Faculty Program

^{*1} Center for Education in Liberal Arts and Sciences, Osaka University 1-16 Machikaneyama-cho, Toyonaka City, Osaka, 560-0043 Japan

表1 大阪大学未来の大学教員養成プログラムの概要

| | 科目名 | 内容 | 履修条件 |
|----|--------------|------------------------------------|------|
| 必修 | 大学授業開発論Ⅰ | 授業デザインと基本的な教育技法の知識学習とトレーニング | なし |
| | 大学授業開発論Ⅱ | 高度な教育技法のトレーニング, 授業実習・授業観察 | Iの修了 |
| | 大学授業開発論Ⅲ | SoTLに基づく教育実践研究の計画作成, 研究・教育・社会貢献の統合 | Iの修了 |
| 選択 | 学術的文章とその指導 | ライティング指導のトレーニング | なし |
| | 現代キャリアデザイン特論 | 大学院生向けのキャリアデザインの方法と実践 | なし |

2014年度より全大学院生向けに開催している(根岸・佐藤 2015)。本プログラムは、表1に示す通り、5つの授業科目から構成されている(2015年度)。中でも必修科目である「大学授業開発論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(以後 FFPⅠ・Ⅱ・Ⅲ)」はそれぞれ、大学の教授学習に関する知識(I)、実践のスキル(Ⅱ)、知識と実践の統合(Ⅲ)を学ぶことを目的としている。

2.2. 大学授業開発論Ⅲ

本研究が対象とする FFPⅢは、3日間の集中講義で実施された(2016年2月16日～18日)。授業内容は①SoTLに基づく教育実践研究の計画、②教育の抱負作成、③研究の抱負の作成、④社会貢献の抱負の作成、⑤研究・教育・社会貢献の統合の試みという5つの内容で構成される(大山ほか 2016)。

本論文で扱う①SoTLに基づく教育実践研究の計画について、授業では、まず SoTL について、その概念と意義を講義形式で学ぶ。その後、大学での教育実践を研究対象とした SoTL 論文(英語および日本語)について各自の専門分野、あるいは関心のある教育課題について書かれている論文を任意で選択した。なお、SoTL 論文は、担当教員が受講生の専門分野や、多様な授業形式等を考慮して、選択した上で複数を提示した。受講生は、選択した論文を閲読し、各自要約を行った上で批判的な考察を行い(60分間)、全員でそれらの内容を共有した(40分間)。続いて、受講生の持つ教育実践(実践を持っていない場合は、FFPⅠやⅡで作成した授業計画書)に基づいて、カナダブリティッシュコ

表2 受講生の学年と所属研究科

| | 所属研究科 | 人数 |
|------|--|----|
| 博士課程 | 国際公共政策(1), 人間科学(1) | 2 |
| 修士課程 | 医学系【看護】(3), 医学系【保健】(1) 言語文化(1), 生命機能(1) | 6 |

() は内訳人数を表す

ロンビア大学が実施する SoTL ワークショップの枠組み(JONESほか 2014)を参考に、1. 問いを立てる→2. 研究のアプローチを設定する→3. 実践における必要条件を考える、というプロセスで3つのワークシートの作成を通して教育実践研究の立案を行った。具体的に、ワークシート1では、【対象とする教育実践、教育・研究上の問い】、ワークシート2では、1に加えて【指標、研究アプローチ、チャンス・有利な点、課題・予想される困難】、ワークシート3では1と2に加えて【何をすべきか(タスク)、誰が行うか、必要な物品・予算、いつまでにやるのか?】という順で計画を進めた。ワークシート記入の前には、担当教員からそれぞれ具体的な事例が示されており、それらを参考にして記入が進められた(各シート個人ワーク10分間)。またそれぞれのワークシートが完成した際には、随時ペアワークで内容を共有し(10分間)、ペアからのフィードバックに基づいて修正を行いながら進められた。ワークシート3の完成後、一人5分間で、研究テーマ・研究目的・研究対象・研究方法・取得データを含む内容で発表を行い、相互評価を行った。

3. 方 法

3.1. 対象

受講生8名を対象とする。受講生の所属と学年の内訳は表2の通りである。ただし、このうち、医学系に所属する受講生は、全員現場での社会人経験を有している。

3.2. 分析方法

SoTLに基づいた教育実践研究の計画を評価するために、以下の3つのデータを収集、分析した。

- (1) 受講生が作成した教育実践研究計画のテーマについて KJ 法を参考に、カテゴリ分析を行った。
- (2) 授業終了後に行ったアンケート調査を集計した。アンケートの主な内容は、【学習到達度の確認・満足度・各ユニットの理解の確認】である。なおこれらは5件法における選択と自由記述による回答を求めた。
- (3) さらに多様なテーマから詳細な情報を得るために、表3の中カテゴリから1名ずつ、計5名(作成者 A~E)に半構造化インタビューを実施した(2016年3月29日～4月1日)。インタビューの内容は【自身のキャリアにおける本プログラムの位置づけ・教育に対する視座・SoTLへの認識】で

あった。インタビューは、全て文字に起こし、KJ法を参考にしてカテゴリ化を行った。

4. 結果と考察

4.1. 授業の実際

受講生全員が全ての課題に取組み、高い評価で修了した。事後アンケートでは、「この授業を通して身に付けるべきものとして期待された学習成果が得られた」という質問に対して、8名全員が「5. 非常に思う」と答えており、「SoTL の概念を十分に理解できましたか」という質問に対して、1名が「5. 非常に思う」、7名が「4. そう思う」と回答していることから、SoTL ならびに授業全体として、理解の実感が十分に得られたことが確認された。

4.2. 経験によるテーマ設定の傾向

作成された教育実践研究計画のテーマと、それらをご大・中カテゴリに分けたものを表3に示す。

教育実践研究として設定されたテーマは、大きく「一般的教授法」と「分野特有の課題」を扱ったものに大別された。一般的教授法を設定した5名のうち、4名が修士課程の学生であった。ここでは教授方法に焦点化した課題が設定されており、受講生が履修済みのFFPI で学習した多様な教授方法に関する知識が活用されていると考えられる。一方「分野特有の課題」内の『実践経験に基づく課題』を設定した受講生HとDは、どちらも高等教育機関での教育経験があり、『分野の内容に基づく課題』を設定した受講生Eも、これまでに指導教員の教育プロジェクトに関与した経験があった。

このことから、経験によって設定される課題の焦点が異なる可能性が示唆された。したがって、教育経験に応じたテーマ設定を可能にするためには、「研究の問い」について考える際に、多様な事例を示すことが

有効であると考えられる。

4.3. 教育実践研究を計画する意義

インタビューの内容をカテゴリ化したものを表4に示す。大カテゴリは、「教授活動改善の根拠」「教育実践と教育実践研究業績の相乗的向上」が得られたことから、教育実践研究の計画を通して、受講生は自らの教育実践を分析し、教育実践研究として公開する意義を見出したと考えられる。このことから、教育実践研究を計画することは、教育実践を自らの感覚ではなく、根拠をもって実践することの重要性の認識、ならびに研究業績の増幅をねらうだけではなく、自らの専門分野の研究と教育の関連性の熟考を促す可能性が示唆された。

これらのことは、大学院生が、将来大学教員になった際に、持続的に教授活動を改善するための一助になると考えられる。

4.4. プログラムの課題

上記の通り、受講生は、SoTL に基づいた教育実践研究の計画に意義を見出していたが、実際に就職した際の実現可能性について、以下の発言から、コミュニティが重要であると認識していることが確認された。「一人では難しそう。どうやってやればよいかもわからないし、何がスタンダードかもわからないから、仲間は絶対に必要だと思いますね。3/29(A)」、「特に異分野の人と、ディスカッションしながら、進めていきたい。何でも話すことができるし、幅が広がると思います。3/29 (B)」「手探りなので、グループでやりたいですね。FFP のメンバーで同時にできるといいと思います。3/31 (C)」以上から、当該授業において、他受講生と十分にディスカッションしたことが、計画を前進させるのに有効に働いたことが示唆された。したがって、FFP において、SoTL に基づいた教育実践研究計画を実行に移すためには、FFP 受講生による修了生のネット

表3 教育実践計画のテーマ

| 大カテゴリ | 中カテゴリ | 教育実践研究のテーマ | 作成者 |
|---------|-------------|--|---|
| 一般的教授法 | グループ学習 | グループ学習の参加意欲の向上におけるグループ分けの効果の検証 | A |
| | | 講義法における資料配布の効果の検証 | F |
| | 講義法 | 講義法における座席位置指定が学習者に与える影響 | B |
| | | 反転授業 | 反転授業が学生に自主的な学習を促すことができるか 演習型授業における反転授業の効果の検証 |
| 分野特有の課題 | 実践経験に基づく課題 | 学生が主体性を持って学ぶ反転授業は国家試験合格率をあげるために有効であるか ～歯科衛生士国家試験での栄養学について～ | H |
| | | 看護師国家試験対策における e-learning 活用の有効性について | D |
| | 分野の内容に基づく課題 | 大学学部で社会学専門外の学生たちは、「女性学」に対し、どのようなイメージを持っており、どこまで知識を持っているのか | E |

表4 インタビューのカテゴリ分析結果

| 大カテゴリ | 中カテゴリ | トランスクリプションの事例 |
|---------------------|-----------------------|--|
| 教授活動改善の根拠 | 実践の意義の再発見 | 自分の教育実践が改めて根拠を持つことができるので、とても大切なことだと思っています。 4/1 (E) |
| | リフレクションの機会 | やっているときは、無我夢中ですけど、次に向けてどうしたらいいのか、とか、課題を見つめるようになります。 3/29 (B) |
| | 自身の専門分野の研究と教育の関連性 | これを publish することで、研究も意味あるものになるし、教育も意味あるものになるでしょうね。 3/31 (C) |
| 教育実践と教育実践研究業績の相乗的向上 | 授業を客観的に観る視点の獲得 | 自分の授業を批判できるようになるのは、重要なことだと思います。 3/29 (B) |
| | 教育実践研究の公開による責任感 | publish するということは、自分の業績にもなるし、いいものじゃないと publish できないし。 open にするというは、いいものを生み出すということですよ。自分がレベルアップしそう。 3/29 (B) |
| | 公開による学問分野における教育のレベル向上 | 学内の紀要でもとにかく出して、業績を増やすことは大切だと思います。あと、それを同僚と共有するのでも大切だと思いますね。そうすると、みんなの教育が向上するでしょうし。 4/1 (E) |

ワークを構築し、そこで定期的に教育実践研究に関する議論を行う場を支援することが重要であり、プログラム改善の課題として示された。

5. まとめと展望

本研究では、プレFDプログラムにおいて、教育実践研究を計画するプログラムを開発・実践し、それらの評価と課題を検討した。その結果、受講生の教育経験によって、教育実践研究計画のテーマの質が異なること、計画の作成を通して、SoTLが教授活動改善の根拠になると認識し、教育実践と教育実践研究業績が相乗的に寄与すると受講生自身が意義付けていることが示唆された。また、教育実践研究を実現するためには、一緒に推進するための仲間が存在が重要であることから、プログラム修了後のコミュニティ構築に関するサポートといった課題が示された。

本研究では、教育実践研究の計画を作成することどまったが、教育実践研究が教授活動の持続的な改善に、どのように関連するのかを明らかにするために、継続した調査が必要であると考えられる。

付 記

本研究は、大山ほか(2016)をもとに、加筆・修正したものである。

参 考 文 献

BOYER, E.L. (1990) *Scholarship Reconsidered: Priorities of the Professoriate*. The Carnegie Foundation for the Advancement of teaching. 有本章(訳) (1996) 大学教授職の使命. 玉川大学出版部, 東京

JONES, F., ROLL, I., HAN, A. and BRIROL, G. (2014) A Hands-on

Workshop on Evaluating Teaching Enhancement Projects. *CWSEI end-of-year*.

今野文子 (2016) 大学院生を対象とした大学教員養成プログラム(プレFD)の動向と東北大学における取組み. 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 2: 61-74

栗田佳代子・中原淳・吉見俊哉 (2014) 東京大学フューチャーファカルティプログラムの意義と展望. *IDE 大学現在の高等教育*, 559:46-50

根岸千悠・佐藤浩章 (2015) 授業の観察と実践が授業者としての大学院生に与えるインパクト—大阪大学未来の大学教員養成プログラムを例に. 日本教育工学会第31回全国大会, 101-102

夏目達也 (2011) 大学教育の質保証方策としてのFDの可能性—FDの新たな展開の諸相—. *名古屋高等教育研究*, 11: 133-152

大山牧子・田口真奈 (2014) カード構造化法を用いた大学初任教員の授業省察. *日本教育工学会論文誌*. 37(suppl): 173-176

大山牧子・根岸千悠・佐藤浩章 (2016) SoTLに基づいた教育実践研究に関するプレFDプログラム開発と評価—大阪大学未来の大学教員養成プログラムを事例に—. *大学教育学会第38回大会*, 108-109

SHULMAN, L. (1999) Taking Learning Seriously. *Change*, 31(4):10-17

田口真奈・西森年寿・神藤貴昭・中村晃・中原淳 (2006) 高等教育機関における初任者を対象としたFDの現状と課題. *日本教育工学会論文誌*, 30(1):19-28

田口真奈・出口康夫・赤嶺宏介・半澤礼之・松下佳代 (2010) 未来のファカルティをどう育てるか—京都大学文学研究科プレFDプロジェクトの試みを通じて—. *京都大学高等教育研究*, 16:91-111

(Received April 5, 2017)